

坂口安吾

金錢無情





金  
錢  
無  
情



最上清人<sup>もがみ</sup>は哲学者<sup>てつがくしや</sup>だ。十年ほど前、エピキュロスにおける何とかという論文と、プラトンの何とかという論文を私も雑誌に見かけたことがあるが、その後は著作はやらなくなり、講壇<sup>こうだん</sup>に立ったことは一度もないので、哲学専門の学生でも彼の名は知らない。

先日私のもとに訪れてきた雑誌記者の話によれば、彼の恩師のDD氏は、哲学界の新人は？ という記者の問に答えて、さて、新人かどうか、彼はすでに旧人だが、

と、最上清人の名をあげて、彼の思想はギリシヤにもローマにも近代にも似ていない、ただ人間に似ている。最も個性的な仕事が可能できるのだが、彼は著作しないだろうと答えたという。実際彼は記者から執筆しつぴつの依頼いらいを受けて応じたことは、すでに十年、絶無であった。

私はしかし他でも彼の評判を耳にしたことがあった。

Q Q 神父およ及び L L 氏、L L 氏は日本の大学では文学史や中世思想史を講ぜられたが、本国仏蘭西フランスにおいては著名な羅典ラテン語学者で、私はこの御両名ごりようめいから、日本において本当に羅典語を解する人は最上清人だろうと承うけたまわった

ことがある。彼はそのころある書店で古典の叢書編纂そうしよへんさんに  
当っておりほんやくしゃ翻訳者を探していた。私は彼と中学時代の同  
窓であるが、彼が羅典語に通じているということとは、そ  
の時まで知らなかった。

彼は昔むかし、心中したことがあった。相手の女は銘酒屋めいしゆ  
の娼婦しょうふで、女は死んだが、彼は生き返った。警察の取  
調べを受けて、死んでも生きてても同じことだ、と呟つぶやい  
たという。私は旧友の名を新聞記事の中に見出しながら  
吹きだしたのであるが、後日彼と交游こうゆうを深めるようにな  
って、僕は首くくりを主張したが、女が催眠薬にしよう

と云<sup>い</sup>ってきかなかったんだ、僕は自殺は考えていたが心中という考えはなかつたので、女が催眠薬をのむというなら、僕は僕で首くくりをした方がよかつたんだが、僕が先に死んじやってぶら下つたんじや<sup>おそろ</sup>怖しいと女が言うんでね、万やむを得ず心中的になつちやつたんだ、と言つた。

彼が著作をやめたのは、その頃<sup>ころ</sup>からだ。彼は哲学者とよばれると、時にはおつくうそうに否定する。僕は人間しか見ていない。宇宙を見なくなつたから、宇宙を見なければ哲学者じやないんだ、と呟いたこともある。そし

て、まあ、人間観察家とでも言うんだらう。そのほかに情熱もないんだからと言ったりしたが、近頃ではもう人間観察家とも自称しない。僕は飲み屋の亭主ていしゅだと答えるのである。彼が自分とは何者かハッキリ答えるようになってきたのは全く近頃のことであり、はじめて彼はいくらか生き生きと自分は何者か、自覚した様子であった。彼は「タヌキ屋」という飲み屋の亭主そういに相違ない。彼は心中をやりそこねるまでは独身だったが、その後女房にようぼうを五人かえた。そのうち二人は女の方から逃にげだし、二人は彼が追いだして、五人目は戦争中つとめてい

た軍需会社へ徴用<sup>ちようよう</sup>で入ってきた女で、待合<sup>まちあい</sup>の娘<sup>むすめ</sup>であった。結婚<sup>けっこん</sup>したとき、娘はまだ女学校を卒業したばかり、十九であったが、清人は四十であった。

これはまったく「幻想<sup>げんそう</sup>的<sup>てき</sup>」な結婚であったと富子は自ら述べている。

富子は生家の職業によって幼少から男には馴<sup>な</sup>れており、女学校の頃から大学生と映画見物にでかけたり、お客に旅行に連れて行ってもらったり、しかし実の心は芸者や遊客の生態に反感を覚えていると思っていた。その実そういう生態に同化して育ってしまったということに

は気がつかないだけの話であつた。

芸者は義理人情だの伊達引だの金より心だの色色に表向きのお体裁ていさいはあるけれども、本心はみんな単純な男好きで、美男子好みで、旦那だんなに隠かくれて若い色男と遊んでいゝる。富子も美男子好みで、色男の大学生や若い将校などと映画見物や物を食たべにでかけるのが好きであつたが、そのうちに、そういう自分をだんだん軽蔑けいべつするようになってきた。つまり芸者の世界を軽蔑するようになり、自分こころはもっと高尚こうしょうな別な人間だという風に考える習慣がついたのである。

だから十八ぐらいからの富子の書齋しよさいをのぞいた人は呆あつ気けにとられたはずで、アラんだのヴァレリイだのベルグソんだのテーヌだの、小説でもスタンダール、ボルテール、メリメ、プルウスト、ヴァンヂャマン・コンスタン等々、それに美学の本がたくさんある。なんでも表題に美という字のある有難そうな本はみんな買ったという感じなのだが、まったくまた一いつしようけんめい生懸命いっしょうけんめいに読んだものだ。

徴用の会社で清人と同時にまだ大学を出たばかりの美男子の技術家にも言いよられ、待合へ遊びにきた青年将校にも結婚を申もうしこ込まれて、これがまた絶世の美男子で、

顔を見つめるとからだ<sup>かた</sup>が堅くなつて息苦しくなり胸のぐあいが拳<sup>こぶし</sup>を握りしめる<sup>にぎ</sup>るような感じになる始末であつたが、富子は美男子などは軽蔑すべき存在だと考えた。美男子を愛すなんて低俗で不純なことであり、高い恋愛はもつと精神的なものだと思つたのだ。

もとより小娘の幻想的恋愛論などというものは、彼女にまことの恋愛が起つてしまえば一挙に効力を失うものだが、富子は要するに美男子を見るとマツカになつたり息苦しくなつたというだけで、恋愛までには至らなかつた。だから結婚は早すぎたので、当人も結婚の慾<sup>よつきゆう</sup>求な

どはなかったのだが、生めよふやせよという時代思想で、十九などはもう晩婚の御時世であり、家も焼け会社も焼け、一家は田舎いなかへ疎開そかいという時に、なんとなく疎開がいやで、清人と結婚してしまった。

しかし、清人との結婚までには半年あまりの恋愛的期間があった。富子はこれこそまことの恋愛なんだとその時は思ったのだから。

一方清人は四度目の女房に逃げられたあとの一人暮ぐらしで、哲学者というところから富子に物をきかれたり本を貸したりするうちに、これは脈があるなと思うと、ここ

をせんとど食い下って口説きはじめた。

彼は人間観察家などと自称はしても所詮しよせんは学究で、彼のアフォーリズムなど実生活では役に立たない寝言ねごとの類たぐい、惚ほれた女はいつも逃げられる始末であつたが、この美少女に成功したのは犬も歩けば何とかいうまぐれ当りで、美男子の競争相手があるのだから、不安になつたり、わくわくしたり、しかし案外馬鹿ばかな娘だなどと考えて、計画をねっていた。

富子の母親にはお金持の旦那があつて金に不自由がな  
いから、娘を芸者ひとかせに一稼ひとかせぎなどという考えはなく、しか

るべき男と結婚させてと大いに高い望みをかけている。  
 だから四十男の貧乏な哲学者など話の外だと思つてお  
 り、無口で陰鬱いんうつで大酒のみで礼儀作法れいぎを心得ず、社交性  
 がみじんもなくて、おまけに風采ふうさいはあがらない。一つも  
 取柄とりえというものがなから頭から罵倒ばとうする。山奥やまおくから来  
 て花柳地かりゆうに住みついた女中共は半可通の粹いき好みだから  
 悪評は決定的の極上品で、土の中からぬきたてのゴボウ  
 みたいだと言う。なるほど、うまい。全く孤影こえい悄然しやうぜん、挨拶あいさつ  
 一つ言わず、頭をペコリとも下げないから土だらけのゴ  
 ボウのようだ。

富子は意地を張った。周囲の悪評の故に、この恋はじゆんすい純粹高尚だと考えた。俗物どもに分らないから純粹なので、彼が色男でなく、お金持でもないから高尚なのだ。富子は男の高い知性だけを愛している自分がひどく優しゆう秀で、俗ならぬ深遠な恋を神に許された特別な女のように考えた。

そこで清人もこれは知識以外の他のすべてをみすばらしくする方がかえつて好かれる方法だと知るに至った始末で、富子はお金持だから、奢おごってくれたり、ウイスキーを持ってきてくれたり、ネクタイをくれたり、洋服を

つくつてくれたり、ついにはお金までくれる。彼は嬉しうれそう  
な一本の小皺こじわも見せず面白くもないという顔付をし  
てそれを貰もらう。すると富子は清人が高雅こうがで精神的そのも  
のだと云つてひそかに大満足するという寸法で、だから  
清人は外見はなるべくみじめ貧弱にして、精神的高さと  
いうものだけ見せるという戦法にたよつた。

元来は十九の美少女と結婚するのもまた面白しという  
発願ほっかんであつたが、意外やお金持で色々おごつてくれるか  
ら、これはもうお金のためにもぜひと娘をものにしな  
ければならないのだと考えた。金が宇宙の中心だという

のは彼の説で、だから彼は哲学などは馬鹿らしくなってしまうたのである。

終戦後、破壊のあとは万事享楽から復興するということ彼の明察によつて、富子の母の旦那からお金を貰わせて、駅前の横町へバラツクをたて、一杯飲み屋を始めた。彼はカントの流儀によつて哲学はまた食通だという建前で、ソースなどは自分で作れるぐらい、昔は相当料理の本を読んで、牛の脳味噌、牛の尻尾、臍モツの料理、雉の腹へ色色の珍味をつめて焼きあげる奴、マカロニ料理からチャプスイに至るまで自ら料理のできるほど色々

通じている。そこで八月十五日正午ラジオの放送が君が代で終ると、よろしい、もう相手はアメリカだ、進駐軍しんちゆうぐんの味覚を相手に料理の腕うでをふるって、大いにお金をもうけ、新日本のチャムピオンとなつてやるんだ、と野心を起した。もとより富子は大賛成で、母の旦那にたのんで大金をだしてもらつた。

バラツクの出来上つたころはもう進駐軍は日本の一般いっぱん飲食店へは這入れぬ定めになつたけれども、元来がそういう魂胆こんたんの設計だから、ちよつとあちらの一品料理屋とそういう感じで、コック場などもあちらのお客の潔癖けつぺきに応じ

て安心感を与あたえるように工夫がこらしてあるという心こころ掛がけである。沈ちん思し黙も考こうの哲人たるもの処世において手ぬかりはなかつたはずだが、あちらのお客はダメだとなつて、なんだ、日本人か、バカバカしい、彼は料理の情熱がなくなつた。そこであちら名の気のきいた店名なぞ三ツ四ツあれこれ胸にたくわえていたのを投げだして、タヌキ屋、これでたくさんだ、お前、お金をもうける、もうけたお金は余が飲む、というようなわけで、彼はつまり、僕は飲み屋の亭主です、最も一般的な型をとることにしたのである。

富子は結婚してみても、哲学者だの精神的だの、およそ  
 とんでもない、タヌキ屋、なるほど、まさしく宿六は<sup>やどろく</sup>大  
 狸<sup>だぬき</sup>だと気がついた。大狸、大泥棒<sup>おおどろぼう</sup>、まさしく宿六は金  
 銭の奴隷<sup>どれい</sup>、女郎屋<sup>じよろうや</sup>のオヤヂ、血も涙もない、金々々、女  
 房にかせがせておいてお金はみんな自分のふところへ入  
 れ、自分は毎晩大酒をのむが、富子が十円のミカンを買  
 ったたべてもゼイタクだと怒<sup>おこ</sup>る。二日二晩ぐらい怒るの  
 だ。

哲人は実務にうといなどとはマツカないつわり、ソロ  
 バン勘定<sup>かんじょう</sup>にたけ、およそソツがない、ちよつと料理を

しても、富子も相当気転のきく女だけれどもうちの宿六にかかってはてんでダメで、庖丁ほうちようや皿や醤油の壺の置き場所まで無駄足むだあしのないよう最短距離の心得によって並べてあり、なんでもその流儀で、ツと云えばカと云う、めまぐるしいほど注意が行きとどいて、太刀打ちたちができない。

そのくせ骨の髄ずいからの怠なまけ者で、ただもう飲み屋の亭主の一般的な型によって、麻雀マーじゃんとか碁などで昼を送り、夜は虎になって戻ってくる。哲学いずこにありや。精神的などはもうそんなことを考えただけでも富子の方が

はずかしくて赤くなるぐらい、また、助平すけべえなこと、やたらにベタベタ、からんだり吸いついたり、理想などというものは何一つない。ただもう守銭奴しゆせんどであり、大酒のみであり、大助平である以外に何もなし。

ベタベタモチヤモチヤいやだったら、このろくでなしの大泥棒、よその女に好かれるものなら好かれてきてごらん、一度でいいから、好かれておいで。私はもうお前さんとは寝てやらないから。富子がこう叫んで起き上つて蹴けとばしたら、宿六は洩水はなすいをたらしして半分居眠りながら、人間か。この人を見よ。僕はそう言える。そんなこ

とを言った。

しかし富子はうちの宿六はたしかにほんとに偉いんじえらやないかと思うことがあった。それはつまり、守銭奴で大酒飲みで大助平で怠け者で精神的なんてものは何一つないというのはつまり人間が根はそれだけのくせに誰もそれだけだということを知らないだけなんだ、といううちの宿六の説がどうも本当にそういうものかしらと思われるような時があるからである。しかし本当にそうだった、本当にそうでは困る。本当にそうだということなんか、ちっとも偉くないじゃないか。

富子は芸者の生態に反感をいだいたことが失敗のもとで、若い美男子の好きなのが自分の本音であり、実際は芸者と同じように自分も浮気性うわきしょうなので、だからほんぜんほんぜん翻然本然の自分に立ちかえってやり直してやれ、と考えた。

そんな考えになったのは「タヌキ屋」をはじめてお客様の接待にでるからで、料理は女中がやる、富子が接待に当る、開店の時は美人女給も一名おいてみたけれども、お客様の評判は富子の方がむしろはなは甚だ好評だから、まんならではない、結婚して大損した、そういう気持が強くなった。

するとそこへ現れたのは絹川という絶世の美男子で二十七になる会社員だ。あぶらっば油壺から出てきたようなとはこの男で、お酒は一本しか飲まない、お料理はほとんどとらない、そして長く話しこんで行く。毎日いらっしやいな、と言うと、でも貧乏でダメというから、富子は外のお客から高く金をとって、値段は書きだしてないから高くとつても分らないので、それで宿六の知らない利潤をあげて、今日は半分にまけてあげるわとか、今日はお金はいらないことよ、とか、だから毎日おいでなさいという意味をほのめかしても五日に一度ぐらいしか来ない。

奥さんは美人だなア、とか、教養が高くて僕の始めての驚異の女性だななどと嬉しがらせを言って帰る。しかしどうもお酒を安く飲ませて貰う御義理の御返礼という感じでピッタリしないけれども、富子はそれを承知の上でなんとなく嬉しい気持になる。

そこへもう一人現れた。ダンスホールのバンドにいるというヴァイオリンをひく男で、三十歳、荒みすさきつた感じだけれども、話してみると子供のような純粹なところがある。戦争中は満洲に流れていたというが、まったく見るからのボヘミアン、内職に闇屋をやってお金をもう

けているなどというのが、信用ができないような、何か痛々しいような感じがする。病的なぐらい透きとおるような白い顔で、荒れ果て<sup>よど</sup>濼んだ翳<sup>かげ</sup>の奥に、冷めたい宝石のような美しさがたたえられている。悲しくなるやうな美しさで、よく見るとひどく高雅で、孤独で、きびしい何かがある。

瀬戸<sup>せと</sup>というこの楽師は大酒飲みだ。来始めると毎晩きつて、とことんまで飲む。かなり収入はあるようだが、飲む分量が多すぎるから、たちまち借金はかさむ一方だが、そこで富子の心痛がふえた。清人は客の借金を極度に嫌

つて、がむしやらに催促させ、借金とりに日参させ、現金でなければ飲ませないと言明せよと脅迫する。まったく脅迫で、一度でも借金したら、必ずそう言明しろ、借金しはらの支払しはらわれるまでお前の食事を半分に減らせとか、お風呂へ行く小遣こづかいもくれない。

けれども富子はなんとかして瀬戸には毎晩来て貰いたいから、この借金は清人に知らせたくない。清人は深夜に帰ってくるから店のことは知らないが、朝日がさめると前夜の酒の減り方をしらべて売り上げと合わせ、綿密に計算してみじんもごまかす隙すきがないから、富子はどう

しても外のお客に高く売ってツジツマを合せたいが、瀬戸の酒量が大きすぎて、とても埋合せうめあわがつきかねる。

スタンドだからチップを置くという客もすくなく、おまけに清人が小遣いをくれず、チップを稼げ、それが腕だ、それで小遣いをこしらえろ、酒場で働く女のくせに遊んで暮すチップもかせげない奴はバカだと言う。一晚に千円のチップを置く奴には接吻ぐらいさせてもいいし、一万円おく奴には身をまかせてもいい。その代り、接吻と身をまかせたチップは俺が貰う。なぜなら俺は亭主だから、女房の貞操を売るのはお前でなくて俺なんだ

から、と言う。清人は相当チップがあるものと考えて、時にはヘソクリを見せる、少し貸せなどと云うけれども、富子のチップは意外に少く、一月分を合せても瀬戸の一夜の飲み代の半分にも当らぬぐらい、そこで万やむを得ず外のお客に法外の代金をつける。それでお客がめつきり減って、もうゴマカシがつかなくなった。瀬戸一人の借金を十人ぐらいの名前にわけて宿六の罵倒脅迫暴力を忍んでいたが、急に借金の客がふえる一方、売上げがぐんぐん減るから、もとより清人は人一倍鋭敏えいびん、これは臭いい曰わくがあると思ひ、自分は知らぬ顔をして、旧友の一

人にたのんで、お客に化けて行かせ様子を見てもらう、この旧友がしかるに意外のその道の達人で、五日いっか通い、瀬戸も絹川の顔も見て、なぜ客が減ったか法外な値段の秘密、みんな隈くまなくかぎだした。しかし胸に一計があるから、すぐさまこれを打ち開けなかった。

富子はもうセツパづまっていた。宿六には秘密で誰かに身をまかせてお金をかせいでごまかすか、瀬戸とカケオチするか、瀬戸に心がひかれるけれども、絹川の男っぷりも捨てられないところがある、というような気持もある。

瀬戸はいささか酒乱で、泥酔すると、狂暴になるとき、陰鬱になるとき、センチになるとき、皮肉屋になるとき、意地悪になるとき、色々で、しかし酔っ払いはみんな大言壮語そつご、自慢をはじめめるものであるが、この男ばかりは自慢ということをやらぬ。自嘲じちようばかりだ。その代り人を皮肉り、いやがらせる。そして、必ずエロになり、富子を客席の側へよんで膝へのつかれと言う。膝へのつかると、あとはセンチな唄を唄うばかりで別に何もしないのだが、しかし富子は外のお客がいる前でも、言われると下のくぐりをくぐって、膝へのつかりにノコノコ出向く

から、お客が減るのも当然だ。富子はもうヤブレカブレなのだ。金々々、色だか金だか見当もつかないムシヤクシヤした気持で、瀬戸さえいなければ外のお客の膝の上にも乗っかってチップにありつきたい、しかし瀬戸に知れると困る、実際は瀬戸の膝にのつかることではお客は減らず、かえってこれは脈があると、瀬戸のまだ現れぬ時間、なぜなら瀬戸はいつも九時半すぎてくるから、早めに来て、オイ俺の膝にもものつかれと言う客がたくさんある。お客が減るところか、かえってそのために一応お客はふえるぐらいだ。けれど酔っ払いはブレーキがない

から、味をしめて瀬戸のいる時にもやられると困ると思  
うから、大いにチップにありつきたくて仕方がないが、  
どうにもダメで、やむなく変な風にニヤニヤ笑って尻ご  
みする。そのニヤニヤがなんとなく色好みらしく、その  
気がある様子に見えてカン違いをする客もあり、おい泊とま  
りに行こうなどと札束さつたばをみせて意気込んでくる五十男が  
あつたりすると、まったくもう泊ってやらうか、金のた  
めには何でもするというような気持にもなりかけるほど  
だった。恋のためではあるけれども、さしせまった現実  
の問題としてはただ金で、金々々、まったく宿六の守銭

奴が乗りうつり、金銭の悪鬼と化し、金のためには喉から手を出しかねないあさましさが全身にしみつき、物腰にも現れている感じであつた。

瀬戸は富子に良人おっとがあるかときく。あると答えると、良人ぐらいあつたつていいや、俺は口説くんだと言つてみたが、良人は何をする人か、哲学者？ え、名前は、そして最上清人ときくと彼の顔は暗く変つた。

「最上清人。その人の奥さんか」

「あら、その名前知ってる？」

「知ってる。尊敬していた。僕は高等学校の生徒だつ

た。エピキュロスとプラトンについて雑誌に書いてたものを愛読し、今でも敬意が残っている。あの人の奥さんじゃ、ちよつと口説いちゃいけないような気持になつたな」

「あら、瀬戸さんは音楽学校をでたんじやないの？」

「音楽は世すぎ身すぎといふ奴の心臓もので、元々余技ですよ。おはずかしいが、美学をでたんだ。しかしそつちはなおさら余技だな。ただ一介いっかいの放浪者にすぎん。僕の一生には定まる何物もないですよ」

まったくこの男は自慢ということをやらぬから相当つ

きあつても學歷など知らなかつたので、この時は富子がアツと驚いた。そこでもうこの飲んだくれとカケオチしようか、地獄へ落ちてても、あとは野となれ山となれ、一思いに、にわかには富子はそんな気持にもなつたが、同時にまた、するとうちの宿六はやっぱり偉いのかな、そういえばこの放浪者よりはどこかしら自信があるように思われる。

瀬戸は口では最上さんに悪いななどと言いながち、酔っ払うと相変らず富子をだきよせる。一思いに、という気持が日ごとにメラメラ燃え立って激しくなるが、一方

にこの放浪者の心の幅がかえって狭く見えてきた。なまじいに学歴などを知り宿六と同列に考える根拠ができたら、今までモヤモヤ雰囲氣的な観賞だけで済ましているれたものが、もっと冷酷に批判的に見る目できてしまったせいで、たしかにうちの宿六よりも幅が狭い。うちの宿六はやっぱり見どころがあるのかな、しかし、男っぷりが良きや、それでいいんだ、カケオチして女給でもして男に酒をのませたり、また、良い男がみつかったら、それからどうなったって構うもんか、などと色々心迷うのである。

×

清人の依頼いらいで富子の稼稼ぎぶりを五日にわたってつぶさに偵察したのは倉田というこれも哲学くずれの闇屋であった。この人物は宿六が女房に隠れて浮気をし、女房が宿六にかくれて男をもつのは当り前だと思いきんでいるから、タヌキ屋の情勢ぐらいではビクともせず、これはどうも清人御夫妻どちらも教育の必要がある。教育などというものはこれたのも愉しみなものだ、などと考えた。

六日目には、彼は昼間まだお客のないうちにやってきて、

「やあ奥さん、僕はしらっばくれていますでしたが最上の悪友で倉田という者です。最上にたのまれてお店の情勢を偵察というのが仰せつかった役目だけれども、どうも奥さんも、まずすぎるな、色男に飲ませてやりたい気持は分るけれども、外の客からあんな法外のお金をとったんじゃない、お客がこなくなりますよ。お金というものはそんな風に稼ぐものじゃないですよ。社長とか何とかいう五十男が札束をとりだして口説いとったじゃありません

か。ああいう人物とちよつと昼間かなにか二三時間うち合せておいて、よろしくやってくるのですな。亭主が疑つたら、そんなこと大嘘おおうそと言ひ張るのです。現場を亭主につきとめられて布団の中で二人でねているところを見つけられても、嘘よ、と言ひ張るのです。徹頭徹尾知らぬ存ぜぬと言ひ張るのが浮氣のコツなんですな。お金と  
いうものはそんな風にして稼ぐもんです。そして可愛い  
い男に飲ましてやるんですな」

倉田の忠告はたった一日遅すぎた。なかなか倉田の報告がないので、清人は富子を追及した。富子はムカツ腹

をたてて、もう堪らなくなつて洗いざらい叩きつけて、私はもう瀬戸とカケオチするんだと言つてしまつた。

よし出て行け、今晚必ずカケオチしろ、そう言つて富子の横ツ面をたつた一ツだけ叩きつけておいて、いきなり万年筆を持ちだして紙キレへせかせか何か書きだした。おやおや、これが三下り半という奴かと思つて、と、そうじゃなくて、美人女給募集という新聞広告の文案だ。これを握つて物も言わず五六杯お酒をひっかけて新聞社へ駈<sup>か</sup>けて行つた。

「そりやまずいな。好きな人があるんだなんて間違つて

も亭主に言うもんじゃありませんや。第一あなた、カケオチなんて、こんなバカバカしいものはありませんや。亭主なんてえものは何人とりかえてみたって、ただの亭主にすぎませんや。亭主とか女房なんてえものは、一人でたくさんなもので、これはもう人生の貧乏クジ、そツとしておくもんですよ。あなたもしかし最上清人という日本一の哲学者の女房のくせに、あの男の偉大な思想が分らねエのかな。惚ほれたハレたなんて、そりや序曲というもんで、第二楽章から先はもう恋愛などというものは絶対に存在せんです。哲学者だの文士だのヤレ絶対の恋

だなんてもつともらしく書きますけれどね、ありや御  
当人も全然信用していませんで、愛すなんて、そんなこ  
とは、この世に実在せんですよ。それぐれエのことは最  
上がしよちゆう言ってる筈なんだがな。へえ、一日に三  
言ぐれエしか喋しゃべらないですか。もう喋るのもオツクウ  
になつたんだな。その気持は分るよ、まったく。最上も  
しかし酒ばっかり飲んでいて、なんだってまた浮気をし  
ないのかな。あなたにも最上にも私からそれぞれおすす  
めします。そしてあとは私の胸にだけ畳んでおきますか  
ら、御両人それぞれよろしく浮気というものをやりなさ

い。浮気というものは金銭上の取引にすぎんですから、  
まア、ちよつとした保養なんですな。それ以上のものは  
この世に在りやしないです。それにしても、こう申上げ  
ては失礼だけれど、絹川という色男も、瀬戸という色男  
も、どうもあなた、少し役不足じゃありませんか」

「ええそれはうちの宿六はたしかに偉いところもあるけ  
ど、ああまでコチコチに何かから何まで理ヅメの現実家な  
んで、息苦しくって堪らないものよ。恋愛なんてどうせ  
タカの知れたものですから、どうせ序曲だけでしょうけ  
どね、序曲だけだっただけいいじゃありませんか。私はこう

胸元へ短刀を突きつけられたような、そんなふうな緊張が好きなのよ。瀬戸さんは飲んだくれで、弱気で、ボヘミアンなんて見たところちよつと詩的だけど、まったく、たよりないわね。だけど私はもうヤケだから、苦労はするでしょうけど、一思いにカケオチしてやれと思うわ。カケオチしてからの生活なんて、私は二人の家庭なんてもの考えずに、私がどこかの酒場かなんかで働いている、そんなことばかり考えているのよ」

「いけません、いけません。それは誤れる思想です。酒場で働くなら、ここに酒場があります。第一あなた、苦

勞する、苦勞なんていけませんや。この世に最も呪のろうべきものは何か、貧乏です。貧乏はいけません。これだけは質に置いてもこの地上から亡ほろぼさねばならぬものですよ。夢を見ちやいけません。幸福とは現実的なものですよ。ここはあなた自分の酒場じゃありませんか。こいつを活用しなきや。こいつを捨ててよその酒場で働いて男を養うなんてえミミツチイ思想は、ミーチャンハーチャンにはよろしいけれども、最上清人の女房たるものになんですか、あなた。ここはまず当分は私の指図通りにやってごらんなさい。差当さしあたつて、恋愛なるものは、これ

は地上に実在しないものですから、この酒場からも放逐することが必要ですな。ちよつと痛いでしょうけれど、心を鬼にして、瀬戸、絹川、この両名の色男に退場を願う、代つて千客万来、これがまず大切なんですよ。つづいて、恋愛でなしに、浮気、これをやりなさい。面白をかしく、人生とは、人生を生きるとは、これですな。それはあなた最上清人は面白おかしくなんて、面白おかしいものなんて在りやしねえと言うでしょうけれど、それは彼において大真理ではあるでしょうけれど、これが実在するということも真理なんですよ。小真理ですかな。

人生は断じて面白おかしく在りうるです。まず、お金です。金々々。最上先生も常にそれを言つとる筈ではありませんか。金の在る無しによつて、人生は全く別な二つの世界に分れます。しかし、なんだなア、最上先生みてえに、金々々つて言いながら、毎日毎日、ただもう飲んだくれているてえ心理は分らねえ、先生はどうも偉すぎて、何を考えているんだか、手がとどかねえ。しかし、彼は、実際において、日本随一のずいいち哲学者です」

富子もその日は朝から心境がぐらついていた。出て行けと言われて以来ひどく不安になったので、出て行くこ

とと、出て行けということは、結果においては出るという同じ事実に戻すけれども、これを受けとる心持には大いに差があり、出て行けと言われる、なんとなく不安だ。

うちの宿六はただ金銭の奴隷なのだから千客万来がモットーで、ちらと見た広告の文案も美人女給「数名」とある。こんなチツポケな店へ数名は無茶だが、宿六は実際そう考えておるので、なんでもかでもエロサービス、ついでに自分も数名から代りばんこにサービスを受けるつもりに相違なく、富子が出て行く方がまったく万事宿

六の方には都合がよい。

一方よければ一方悪しと云う通り、出たあとの富子の方はどうも分ぶが悪い。えい、ヤケだ、とか、どんな苦勞でも、とか考えていたが、宿六の方に分が良すぎるということを思い知ると、残念で、不安で、追んだされては大変だという氣持になる。

まったく倉田の言う通り、亭主や女房は万人の貧乏クヂで、何度とりかえても亭主は亭主にすぎないだろう。ねている現場を見つかっても知らぬ存ぜぬと言いはれという、なるほど、浮氣のコツはそのへんか。ここは堪え

忍んで、瀬戸に退場してもらい、千客万来、相手をみつ  
けて浮気する。この浮気は始めはもっぱら金のためで、  
ヘソクリを十万百万とつみかさねて、それから瀬戸でも  
誰でも構わない、手当り次第に美男子と遊ぶんだ、もう  
こうなればこっちも金の鬼なんだ、宿六め、見ているが  
いい、そういうような気持になった。

ところが清人はその晩十時頃酔っ払って店へ現れた。  
彼はお客というものは酒のついでに女を口説きにくるも  
のだと信じているから、宿六の姿を見せては営業成績に  
かかわるといふしんぼうえんりよ深謀遠慮で、帰宅は毎晩一時二時、たま

に店の終らぬうちに戻ってきても、客席へ顔を見せることがない。

この晩は出て行け、カケオチしろという、その実行を促進、見届け役で、開店以来の宿六初登場ということになった。

ところが店にはちょうどまたあつらえ向きに瀬戸と絹川が両端に、その中間に倉田がしたたかきこし召している。両端に色男が二人いるから、清人は富子に、おい、ドッチがドッチだ、ああそうか、あっちが瀬戸さん、こっちが絹川さんか。彼は瀬戸のところへ歩いて行った。

「君はもうこの店へ来ない方がよいよ。お金のある時だけ来たまえ。しかし今までの借金は必ず払って貰うから。毎日誰かを取りにやります。お金のあるとき、ある分だけ必ず貰う。全部払い終るまで毎日誰か取りにやります。君はこの女から借りたんじやなくて、僕が貰うお金なんだ。その代りこの女を連れて行きたまえ。君のところへ行きたいそうだから」

「まあまあ最上先生、お待ちなさい。色恋の話はもつと余韻を含めて言うものだ。あなたみたいに、そう棒みたいに結論だけを言ったんじや、話にならない」

倉田がこうとめ役にでたが、

「いや、僕のは色恋の話じゃないんだ。単純な金談だ。

女のことは金談にからまる景品にすぎない」

「いや、金談でもよろしい。ともかく、談と称し話と称するものは、あなたも喋しゃべれば、こちらも喋る、両々相あい

談ずるうちに序論より出発して結論に至るもので、いきなり棒をひっぱるみたいに話のシメククリだけで申渡すんじゃない片手落だな。よろしい、ここはこうしよう。金談の方は、これはもう、借りた金は払うべきものなんで、序論も結論もいらぬ当然な話だから、こちらの方は相

当無理な稼かせぎもして、闇屋もおやりの由承よしっているから、よろしく稼いで、ここはあなたの男の意地ですよ、女の問題がはさまってるなら、金の方はサツパリしたところを見せなきや。それじゃ、この話はこれで終った。次に、最上先生、そこへいきなり附録みたいに女をつけたして言っちゃうのは無理だなア。ともかく今拾ってきた女じゃない、女房なんだから」

「女はみんな女さ。この女が出て行きたい、この人と一緒になると言うんだ」

「そうは言っても、それが全部じゃない。金談とは違う

です。男女の道においては、一つの問いに答える言葉が常に百通りもあるもんですよ。それぐれえのことは、私が言うことじゃなくて、あなたの専売特許みてえなもんじゃないか。やっぱり事、女房となると、あなたのような大学者でも、子供みたいに駄々だをこねるんだな。精神も物質です。これより我々は、私はでて行きます、という物質がちょうどまア石炭みたいに、胸の中のどういう地層で外のどんな物質と一緒に雑居しているか取調べましょう」

「心理をほじくれば矛盾不可決、迷路にきまつてるよ。」

心理から行動へつながる道はその迷路から出てきやしない。話はハッキリしてるんだ。君はこの女が好きか、連れて行きたいと思っただら連れて行け。それだけさ。女もそれを承知だし、僕も承知だ」

「最上先生、はじめてお目にかかりますが、僕、瀬戸です。僕は十年ほど前、高等学校の時に先生の論文を愛読して、尊敬していたのです」

「そんなことを訊きいてやしないよ。自分の言うことも分らない奴に限って、尊敬なんて言葉を使いやがる」

「まあまあ最上先生、そう問いつめたって所詮無理だよ。」

好きだなんて、あなた、好きとは何ですか。女が好きだなんて、あなた、好きにも色々ありますがね、連れて行って同棲するほど好きだなんて、そんなものが、あなた、バカバカしい、この世に在りますか。女房を貰うとか、亭主を貰うとか、これ実に悲しむべき貧乏クジじやありませんか。だからこれはもう万人等しく諦めつつあるところで、あなた方だって、これぐれえのところは諦めなきや。これは色恋の問題じやアない、諦めの問題なんで、この人と奥さんと惚れたハレた、そんなことが問題じやアなくって、女房というものはこれはもう何を

しても諦めなきやアならん。あらゆる女房には一人ずつ必ず諦めつつある男があるもので、あらゆる亭主にもまた一人ずつ諦めつつある女があるです。こんなことを俺に言わせるなんて、最上先生もひでえな。私はもうイヤだよ。よそうじやありませんか。最上先生もよろしく浮気をなさい。浮気ですよ、あなた。この瀬戸君なんて人は何かね、美学なんてものをやると、恋愛だの私の彼女などと、そんなベラボーなことが言いたくなるのかな」

「むろん僕は浮気だけさ。美人募集の広告をだしたのは、そのためだ」

「そんなことはムキになつて言うものじゃありませんよ。あなたも今日は子供みたいだなア」

「富子さん、何か言つて下さい。最上先生、誤解ですよ。」

僕は恋愛でも浮気でもないんです。ただそこはかたなく一つの気分に関心しているだけなんです、僕はつまり精神的にも一介の放浪者にすぎんですから」

「あなたは何も言わなくともいいんだ。あなたのご金は借金だけで、もう話が終っている。借金だけは無理矢理苦面しても払いなさい。さア、あなたはもう帰る時だ。すべて物にはそのしかるべき場所と時とがあるものだ。」

退場すべき時は退場する。私がそこまで送って行ってあげるから」

瀬戸は何か言おうとしたが、倉田は腕をとって外へ連れだして行ってしまった。

清人は絹川のところへ行つた。

「帰りましたえ。もう君もこの店へ来てくれる必要はない。オイ、こちらの勘定はいくら？」

高見の見物をたのしんでいた絹川は、仰天ぎょうてんして蒼白そうはくになり、金を払って、遁走とんそうした。

清人は富子を五ツ六ツひっぱたいて、くるりと振向い

て寝に行つたが、すぐ戻つてきて、

「お客から法外な金をとつて店を寂さびらせた責任をとれ。

二号になれ。そして僕に金を払え。食事は一日に一合だけ、オカユだ。それ以上たべたかつたら、人にたべさせて貰え」

言いすてて、酒をのみに出て行つた。

倉田が瀬戸を電車に送りこんで戻つてくると、富子はワツと泣きふしてしまった。倉田はさすがに少しも騒がず、

「まあまあ、あなた、私にお酒」

泣く女に容赦なく酒を持参させて、

「私がついてる。軍師がいるから大丈夫。安心なさい」  
人生が面白おかしくて堪らない様子で彼は再びメートルをあげはじめた。

×

倉田ほどの達人でも、人生はしかし、彼が狙<sup>ねら</sup>うほど面白おかしくは廻転してくれないのだ。第一にお金が足りない。飲みすぎて足をだすから、パイパイしている毎日

が多く、闇屋やみやみたいなこともやるが、資本を飲むから大闇ができず、人に資本をださせ口銭をかせぐぐらいが関の山で、何のことはない、大望をいだきながらいたずらに他人の懐ふところをもうけさせているようなものだ。あそこ  
の赤新聞で紙を横に流したがつていう。それ、と  
いうので駄けつけて売値をたしかめ、それから諸方の本  
屋につてを求めて買手をさがして、東奔西走、忙しくて  
仕方がなくても、売手買手、両雄チャツカリしたもので、  
口銭はいくらにもならない。

彼はどうしても資本家にはなれないという性格で、そ

うかといつて社員にはなおさらなれない。諸方の会社や資本家にわたりをつけておいて、儲け口を売りこむという天性の自由業、まともなことは何一つできない。

さすがにしかし女はたくさんある。タヌキ屋へ女をつれてきて、御両名の見ている前で堂々と口説いて、あっぱれ貫禄かんろくを見せたこともあるけれども、浮気などというものとは夕で見るほど面白おかしくないもので、何のためこんな下らないところに金を使っちゃったんだか、せつかく骨身をけずった金をと後悔に及ぶようなことばかり、イヤ人生は断じて面白おかしいです、などと瘦我慢やせがまん

に及んでいるが、実際のところは、倉田達人の人生も万人なみに大したことはないのである。けれども、浮気な  
んで、つまらんもんです、と言つてしまつと、首をくく  
つて死ぬ外に手がなくなるから、人生面白し面白し  
金々々と云つて多忙に働きかつ飲みかつ口説いている。

そこへタヌキ屋事件が舞いこんできたから、彼はよろ  
こんだ。彼は元々哲学者で、哲学者などというものは天  
性これ教育者であるから、実際はつまり、自分がやるよ  
りも人にやらせる方が面白い気質で、御夫婦御両名に浮  
気を指南する、打込んでみると、面白い。なおまた面白

いのは、タヌキ屋の軍師となって千客万来を策す、口銭にお酒は安直に飲ませてもらって、つまり研究室の演習という要領で、指南かたがた浮気の演習をやらせる、それが酒の肴さかなで、これはすこぶる面白い。あげくにタヌキ屋が破算壊滅に及んでも、こっちの身には関係がなく、人生面白し面白し、しかし彼は外にも忙しい男だからあつちで儲けこっちで稼ぎ、御自身だつてあちこち浮気もしなければならず、まことにどうも多忙だ。

美人募集の広告が紙上に現れ、最上先生のテストがあつて及第したのが五人、女の子が二人いても有り余る店

へ五人ならべる、女の方で擦れ違うのが大難儀、お客の  
ないときは五人ポカンと一列に並んで、それより外に場  
所がないので、そこへお客が一人で舞いこんでくると相  
当の心臓でもブルブルふるえてしまうから、これじゃア  
いけねえな、と倉田軍師がオコウちゃんというあき呆れるぐ  
らい愛嬌がよくてお喋りでチャツカリしている二十の娘はたち  
をつれてきた。これまたさる待合の娘で、目下軍師自ら  
熱心に口説くどいている最中なので、それじゃこっちで手伝  
ってもらって、どこで口説くのも同じだという軍師の思  
想だ。この娘を戸口の近いところへ置く。軍師のお目

ね違たがわず、女の子がアクビをせず、にいられる程度にお客が現れるようになった。

ここに哀れなのは富子で、ある日外出先から戻ってみると、着物が全部なくなっている。アツパツパのようなものが二着とよれよれのユカタのようなフダン着が残さ  
れているだけ、あとはみんな清人が質に入れてしまった。  
だいたいな常連を怒らせて営業不振をまねいた責任はとら  
ねばならぬ。着物が欲しけりや二号になって旦那から出  
してもらえ、と云って質札しちふだをなげてよこした。

「だって瀬戸さんの借金は瀬戸さんが払う筈じゃありま

せんか」

「バカ。瀬戸の借金は瀬戸が払うのは当りまえだ。そのほかにお客が来なくなつた埋合せはお前がつけなきやならないのだ。二号になりやいいんだ。五六人ぐらいの男にうまく取り入つて共同の二号になれ。待ち合の娘のくせに、それぐらいの腕がなきや、出て行くか、死んじまうか」

ひどいことを言いすてたあとは、いつもプイと出て行ってしまふ。

着物がなければ客席へも出られず、専らお勝手でお料

理作り専門で、くぐり戸から腕だけ差出す、マダムはど  
うしたというお客にも顔がだされず、これでは二号にな  
る術すべもない。

けれども宿六は富子の顔を見るたびに、二号になった  
か、まだならないのか、バカ、と言う。外のことは一切  
喋らない。美人女給もくることになった。富子は衣裳も  
ちで戦争中はそれだけ疎開させておいたから質に入れて  
宿六のふところどころがりがりこんだ金だけでも大きなも  
の、この金によって女給を手なづけて口説こうという肚はら  
がきまっつて、もう宿六の思想は微動もしない。これが分

るから富子は口惜くやしい。彼女が出て行けば宿六の勝利は目に見えているが、出て行かなくともオサンドンではもう我慢がならない。どうしても天下有数の二号になって見下してやりたい。

まったく富子はもう羞はじも外聞もない気持になって、アツパツパで飛びだして、会社の社長や、問屋のオヤジや、印刷所のハゲアタマのところへ途中まで歩きかけてみたが、さすがにすくんで、動くことができなくなって、倉田のアパートへ行った。ところが倉田はもう三日も家へ帰らぬという話だが、留守居るすいの奥方が七ツと五ツの二人

の威勢の良い子供をかかえて愛橋があつて親切だ。マアお上んなさいまし、そのうちに帰るでしようと言つうので、上つて話しこんでいるうちに、夜になり、夜中に倉田が帰つてきて、もう帰れないからとその晩は倉田の آپパートですごした。

ところが、倉田は急にタヌキ屋に興がなくなり、白けきつて、ほとんど遊びに行く気持もなくなつていた。

一つはオコウちゃんなる秘蔵ツ子を差向さしむけたのが手落ちの元で、才腕はあるが、まだ二十の娘で、女といえは芸者しか知らない。花柳界の礼儀で、待合の娘が芸者を

遇する仕来りしきた、芸者が待合の娘を遇する仕来り、ちやんと出来上った粋わくの中で我がまま一杯ハネ返って可愛がられたりオダテられたり、かつまた経営上のラツ腕もふるってきたが、タヌキ屋ではダメだ。タヌキ屋の美人女給は事務員やシヨツプガールあがりの二十三四、四五という半分泥くさい連中で、いかにも浮気がしたくてこの道へ志したという御歴おれきれき々ぞろい、最上先生のテストに及第したのもまたそこを見込まれたることだ。

オコウちゃんと肌合はだあいが違ちがうから、小娘に派手にやられてきり廻まわされて何かと言いわれると腹を立て、余波はめぐ

つて倉田軍師も煙たがらけむれてなんとなく反目を受ける。

倉田は軍師たるの地位により役得は当然あるべきもの、ただで働くバカはない、勤労に対しては報酬がなければならぬ、と考えている。ところが五名の女給は一丸となり、店側の忠実なる鬼の相を露呈して、自ら特権階級を僭せん称しょうする倉田を軽蔑してはばからぬ如くである。

オヤジが金々と凝こりかたまっているから女房のみならず女給までたちまちカブれてしまふ、シヨップガールだの事務員はソロバン高く仕込まれているから金のことになると善悪を超越して守銭奴たることを恥としない。

しかし骨の髄から金に徹した最上清人は、金に徹すれば徹するほど勤労への報酬はハッキリするはずで、親の心子知らず、仕方がない、最上に打開けて女給の魂を入れかえて貰わなければ、と、碁会ごかいしよ所の彼をよびだして一杯のんで、勤労と報酬について一席弁ずる。しかし全然手ごたえがない。

「本当に金銭を解する者にはタダ働きということはないよ。そもそもお金をもうける精神とは勤労に対して所得を要求する精神で、これこれの事にはいくらいくらの報酬をいただききたい、とハッキリきりだす精神だ。靴をみ

がかせても三円。金銭の初心者は人にタダで働かせて自分だけ儲けたがるものだが、こいつは金銭の封建主義という奴で、奴隷相手の殿様じゃアあるまいし、現代には孤立して儲けるなんて絶対主義は成り立たない。この道理を解さなければ、味方というものが一人もなくなる」

「うん、僕は味方が一人もない方がいい。僕は金銭は孤立的なものだと信じているんだ。僕は君に女房のこと、店の情勢を偵察してくれと頼んで、それに対しては報酬を払ったはずだが、それから先のことまでは頼んだ覚えがない。頼まないことには報酬を払う必要はない。金銭

には義理人情はないから、僕の方から頼まないのに靴をみがいたって、お金をやる必要はないね」

「そんな風に人生を理づめに解したんじや、孤影悄然、首でも吊るのが落ちじやないか。万人智恵をしぼってお金儲けに汲きゆう々きゆうたるのが人生で、たのまれない智恵も売って歩く、これがカラ鉄砲なら仕方がないが、当った時には報酬を払ってやらねばならん。こういう智恵の行商人、智恵の闇商人というものを巧みに利用するのが、金を解する者というのだ。信長だの秀吉てえ人々はこういう智恵の闇商人を善用した大家なんだな。ここの理窟

を解さなきやア」

「僕は解さないね。僕には信長や秀吉ほどの夢はないからさ。夢は負担だね。僕の限度と必要に応じて取引するだけで結構じゃないか」

「だから、それがだよ。限度だの必要に応じてと云ったって、そんな重宝なものがどこにありますか。失礼ながら、最上先生は必要に応じて取引して所期の目的を達していますかな。猿面冠さるめんかじや者が淀君よどぎみを物にするには太閤かもにならなければならなかったが、むろん太閤だって蒲生氏郷かうじさとの未亡人や千利休の娘にふられる、だから本当の限度は

きりがない。けれどもともかく狙った女の何割かは物になるてえ限度はあつて、この限度はつまり国持大名だな。これを今日で言うと、恒産こうさんあり、ということだ。失礼ながらタヌキ屋の御亭主はいまだ一城一国のあるじとは申されませんな。足軽じゃアねえかも知れねえ。ともかくタヌキ屋てえノレンの亭主なんだから、三四十石とりのサムライかも知れないけど、どうもまだパツとしない貧乏ザムライで、女の苦勞よりも暮し向きの苦勞が差し迫つてるようなところだろう。だから、あなた、ともかく、大名にならなきや、ダメですよ。国持大名にならなきや

ア。あなたが今どうあがいてみたって、必要に応じて取引して、マル公で通用しやしませんよ。マル公で通用させるにやア、国持大名の格てえものがなきやア、私があるあなたに入れ智恵するのはその理窟で、あなたは目下三四十石のサムライ、私は足軽。私はあなたを国持大名にして、私はせめて家老ぐらいに有りつきたい、ねえ、そうじゃありませんか、持ちつ持たれつというものです」

「君は正統派なんだな。古典派なんだよ。僕はちかごろはやりのデフォルメという奴なんだろう。それに現実の規格が生れつき小さいのさ。僕は総理大臣が美妓びきを物に

しようとならねようとなつて生れつき関心の持てない方で、貧乏な大学生が下宿の女中とうまくやったり八百屋のオヤジが三錢五厘の大根を三錢にまけてやるぐらいでどこかの女中やオカミさんとねんごろになつたりするのばかりが羨しい夕子なんだよ。だから目下の夕又キ屋の貧乏世帯でやりくり浮気するのが性に合ってるんだ。君とは肌合が違ふんだ」

「いけねえなア、そう、ひねくれちやア。最上先生の思想がいかに地べたに密着して地平すれすれに這はい廻るにしても、人間が国持大名を望む夢を失うということとはな

い」

と倉田が慨嘆がいたんしてみても、彼はアクビひとつせず、俺は貧乏な大学生が下宿の娘とうまくやるのが羨しいのだ、とうそぶくのだから手がつけられない。

だから彼はもう軍師の情熱を失って、オコウちゃんにも、もう止よしなさい、あなたがいくら働きを見せたってそれに報いてくれる人じゃアないんだから、ムダですよ、と言ったが、オコウちゃんがまた奇抜な娘で、いいえ、私はもうそんなのが目的じゃアないのよ、五人の女給さんに一泡ふかせてそれからやめるわ、それまで、いるか

ら、と言う。知らねえや、勝手にしろ、と倉田はもうタヌキ屋の方へはめったに現れず、東奔西走、持ちつ持たれつ家老の口という奴をあちらこちらに口をかけて極めて多忙にとび廻り飲み廻り口説き廻っている。

倉田は富子の涙話に長大息。

「そいつは、いけないねえ。それでも思いとどまって、しあわせですよ。アツパツパで、小さくなつて、私を二号にしてちょうだいよ、なんて、それじゃア、あなた、闇のチンピラよりも安く値切り倒されてしまふですよ。ともかく着物をなんとかしましょう」

とオコウちゃんにたのんで、着物をかしてもらった。

ところが富子が着物を失ってお勝手専門になると、お勝手は二人いらぬ、と女中に暇をやってしまった。そこで富子が店へでると、今度は女中の手が足りない。

するとその晩偶然倉田について飲み廻って一緒にとめてもらった青年がある。彼も元来哲学生で、卒業まぎわに召集されて大陸でぶらぶら兵隊生活をして戻ってきたが、闇屋のかたわら小さな雑誌の編輯へんしゅうなど手伝っているうちに倉田と相知り、傾倒して彼を先生とよび、始めて偉大なる思想家に会ったと大いに感激している。

富子の語る一部始終を耳にして、よろしい、そんなら、僕がお勝手をやりましょう、と申しでた。

「おい、君も困ったオツチヨコチヨイだな。お料理なんかできるのか」

「兵隊のとき、大陸でやりましたよ。豚をさいたり、蛇をさいたり、イナゴのテリヤキ、なんでもできますよ」

「そんな荒っぽい料理はいけない」

「いえ、学問の精神は応用の心がまえなんで、わけはな  
いです」

「心がまえと経験は違うよ。第一君、高級料理から下級

料理への応用てえのは分るけれども、蛇とイナゴの方が  
らウナギやエビへ応用をきかせるわけにはいかねえだろ  
う」

「次第に間に合うものですよ。まア、たべて見てごらん  
なさい。兵隊は食通です」

「そんなものかな。俺は知らねえけど、危ねえもんだ  
な。それに君、最上先生は君に充分の報酬をくれるはず  
はないのだから」

「いや、よろしいです。こっちは闇屋渡世とせいでほかに儲け  
の口はありますから。料理の手腕で、今までのコックが

三十円の原料で五十円の料理を作ったものなら、僕は十五円とか十円で五十円の料理をつくる。その差額でタヌキ屋のカストリ焼酎を四五杯のんで引き上げてきて、眠るですよ」

「その思想はよろしい」

というので、コックもできた。そこで店には美形が七人居並び、楽屋にはコック一名、このコックが、いったい哲学者は浮世離れがしているなどとは、いずこの国の伝説だか、彼がまた実に発明、ひどい奴で、よそのうちのハキダメから野菜だの何だの切れはしを拾いあつめて

マンマとお客に食わせてしまう。そこは哲学者だから、天機もらすべからず、腹心のマダム、女給にも口をぬぐって、ひそかによろしくやり、每晚カストリ七八杯傾けるだけの通力を発揮している。

×

借り着に及んで店へでたが、富子のように金銭にやつれてしまうと、借り着までいかにも借り着というように板につかなくなってしまうて、心に卑下ひげがあるから、そ

の翳<sup>かげ</sup>がそっくり外形へ現れて、どことなくすべてに貧相で落附きがない。

それになんとか二号の口にありつきたいという身にあまる焦りがあるから、いかにも哀れに、いやしく、飢え果ててガツガツした感じがつきまとい、昔の颯爽<sup>さつそう</sup>たる面影はなくなっている。

知らないお客はとてこれがマダムなどとは思われず、最も新マイの半分色キチガヒではないかなどと思うほど、落附きなく、アハハと笑ったり、オホホと笑ったり、妙に身体<sup>からだ</sup>をくねらせてニヤニヤしたり、この人の本

来を知る者にとっては、まこと<sup>まこと</sup>にどうも見るに堪えない。

こうなつては宿六たるもの女房が蛆うじのごとくに卑しく見えるから、顔を見るたびに出て行け、としか言葉がない。五人の女給を代りばんこに口説いてみたが、フフンと笑つて逃げたり、アラいやよ、すましてくるりと振向いたり、いけませんよ、と叱られたり、見事に問題にならない。

次には手を代えて、改めて代りばんこに話を大きく持ちかけてみたが、着物を買つてあげるからといった相手は、アラ、マダムの着物を質においたお金でですかと言

い、お店を持たしてあげようと言った相手は、三十万ぐらいなきやダメよ、とニヤニヤてんで取り合わない。温泉へ行こうと誘った相手は、私もう温泉へ一緒に行く人あるのよと軽く一蹴いっしゅうされてしまった。

世界に女が五人だけしかいないわけではないから、最上先生、驚きもせず、金さへありやアいいんだ、倉田の言う通り、豊かでないのが知れているからこうなるので、女房の着物をはいでミジメなところを見せたのなんぞは特別まずかったが、本当に金も欲しかったんだから仕方がない。クヨクヨすることはない、奴らが揃ってその気

持なら、こっちは奴らに稼がせて儲けて、儲けた上で、美人女給は広告一つで集ってくる。マスターの口説は柳に風のくせに、みんなそれぞれ二三人はいい人ができてよろしくやっていることが知れているから、そねむ心は仕方がない、それならそれで、いい人のふところからしぼってやるまでだと、

「よそじゃ、ビール一本二百円から二百八十円で売ってるから、うちは明日から百九十円にするんだ」

とそれだけ言いすてて寝てしまった。富子も困って女給に相談すると、女給もそれじゃ気の毒で客にすすめら

れないからと、碁会所から最上にきてもらって交々こもこもたのむが、百九十円ならよそより安いんだと受けつけない。

「だってそれはカフェーの値段でしょう」

「カフェーじゃ、お通しづき三百五十円から五百円まであるんだ。女のお給仕のついてる店、小料理屋、ちよつとしたオデン小料理で二百円なんだから、百九十円ならよそより安い。客に悪くて売れないなんて、猫の目のように変る相場を知らず、生意気なことを言うもんじやない」

「だって仕入が八十円じゃありませんか。よその相場の

比較よりも、仕入れ相当に売って、よろこばれたり儲けたり、それが商売のよろこびじゃありませんか」

「相場よりも十円安けりやオンの字だ。仕入れの安価は僕の腕なんだから、それを売るのが君らの腕じゃないか。僕の腕にたよって、楽に商売しようというのは、怪けしからん料見だろう。それで厭いやなら止すがいい」

言いすててパイと消えてしまった。一同茫然たるとき、調理場でゴミダメのクズを煮込んだり整理していたコック先生、そのころはもうどこで手に入れたか白いシャツポに白の前だれなんかをしめて、ヤア、みなさん、とは

いつてきた。

「僕が明日から安いカストリを仕入れてくるから、それを主として常連に売って、売切れたら店の品物を売る。ビールやお店のお酒はお値段を前もって申上げて御覚悟の方だけ飲んでいただくのさ。僕が毎日カストリ五升づつ仕入れてきて御一同に千八百円で卸すから、それを三千五百円なり四千円也で売っても、あなた方七人で割って一人あたま三百円ぐらいのもうけになる。この儲けはワリカンで辛抱しなさい。腕次第のもうけはチップの方でさあ。ここの大將の儲けなんぞは、そのおこぼれでた

くさんだ。店がはやってくれば、カストリの方は一斗とでも二斗でもその他ウイスキーでも僕が仕入れてきますから。いかがです、この案は」

アラ大賛成、と富子がまっさきに喜んだ。三百円でも自分のもうけがあるなどとは夢のようだからである。十一時になるとコック先生早目にカストリのカラ缶をぶらさげて引上げてしまう。彼は五升を六百円で仕入れてくるから、九百円もうかる。しかし元値は千五百円で、あなた方なみに三百円しか儲からない、犠牲的奉仕だと言っておく。

「ビール、酒が高すぎる、このカストリも高すぎるてんで、みんなよそで飲んできて、ここじゃ、甜なめているばかりで、もっぱら女を口説いてますな。女で酒を売ろうとすると得えてしてコレ式になるもんでしてな」

とコック氏が素知らぬ顔で大将に言う。すると女給も富子も大将の顔を見るたびに、

「飲み物、値上げしたら、全然のまなくなっちゃったのよ」

と、こぼしたり、

「いっそ、コーヒーでも置いたら？」

などと言ってみたりする。

売り上げは値上げ前の三分の一から良い日でも半分に落ちていいる。どうせ一本二本しか飲まないなら、百円のお通しをつけて、カストリ百五十円、日本酒二百円、ビール三百円にしろ。御無理御もつとも、困ったな、と顔をしかめて、しかし、一同、もう内心は平然たるものがある。

二人づれのお客にはお通しつきを一つだけ無理してもらい、三人づれには二つ、一人でくるお常連は二日目か三日に一度無理してもらおう。あとはカストリのサービス。

これが当って、今日は二つ無理してやるよ、という人もあるし、ナニ、俺は三つ無理してやる、アラいいわよ、そう無理しなくっても。全く、無理しても女人連は内心よろこばないので、カストリの売れる方がよい。近頃ではコック氏は自転車を新調して一斗五升のカンカラカンをつみこんでくる。お通しの売り上げも十五人前から三十人前ほどもでる時があるが、こうたくさん大将に儲けさせる手はないからカストリのお通しはもっぱらコック氏のカンカラカンから捻出ねんしゆつして、大将の所得は平均してお通し十人前、というところ、これでも昔日せきじつの比では

ない。

最上先生ほくそえんで、まア、これぐらいにいけば一日に純益千五百ぐらいあり、女給の給料や諸がかり差引いて千円は残るから、毎日のんだくれてもカストリで我慢してりや一年に十万ぐらい残るだろうと、計算している。

ところがお店の連中の儲けはそれどころじゃない。まづコック氏はカストリの純益千八百円、女人達は九百円ずつ、これにカストリのお通しが平均して一日に二千円あって、これをコック氏も入れて八ツに割り、結局コック

ク氏二千円、女人連千円余、それに女人連にはチップがあり、コック氏にはハキダメの屑くずの上りがあつて、おまけに給料も貰うのだから、大将よりも利益をあげているのである。

こうなるとコック氏の人気は素すばらしい。富子は自然お金がもうかってみると、無理矢理ハゲアタマの二号になることはないのだから、コック氏みたいなたのもしい人物と一緒になつて今の宿六をギャフンと云わせてやりたいと考へた。女人連は女人連で各自浮氣にいそしんでいるが、さて浮氣というものも、やってみると、さのみ

のものじゃアない。もっと何か心棒のある生活がしてみたい。この男ならとあるので、それぞれコック氏に色目を使う。

しかしさすがにコック氏は倉田大達人の弟子であり、浮気などは女房と同じぐらいつまらぬものだ<sup>と</sup>知<sup>っ</sup>てい<sup>る</sup>。目先の浮気などよりも、一城一国のあるじ、国持の大名になるのが大功なんだと、彼は<sup>な</sup>齡<sup>とし</sup>が若いから理想主義者で、倉田が自ら考えながら為<sup>な</sup>し至らざる難関を平チヤラに踏みこす力量を持っていた。

彼は観察して、オコウちゃんの人気は抜群であり、愛

嬌もお客のあしらいも、金勘定のチャツカリぶりも、顔も姿も第一等で、浮気心もまだ知らない。そこで白羽の矢をたてて談判すると、オコウちゃんも彼の手腕に魅了されているところだから、意気投合、しかし利巧りこうな二人だから、誰にさとられることもなく、資金ができ、マーケットの一劃いっかくに店をかり、大工を入れて万事手筈てはずがととのい、いよいよ開店となってお客に発表、手に手をとって消えてしまった。

カストリの卸おろしもと元が引越したから、残された女人連だけでは、あとが続かない。お店のお通し付きばかりでは

元より商売にならない。そこで旬日じゆんじつならずして、他の店へクラガエの者、お客と一緒になるもの、五人の女は一時に消え失せ、残されたのは茫然たる富子ただ一人。

今まで心を一つに働いていた。敵は大将ただ一人、あとは戦友のようなもの、うらはらなく打開けてたのしく日々を暮していたはずであるのに、たのむコツク氏はオウちゃんとして手に手をとってアツという早業であり、残る女人連もヒソヒソ五人同志で相談しても富子には相談しかける者もなく、あなたはどうする、と訊いてくれる者もない。自分達だけ話をきめて、さよならとただ一言、

みんな消え去り、富子だけ置いてきボリをくわされた。

みんなに裏切られ、置いてきボリをくわされ人情の冷めたさに泣いたあとで、気がついたのは、ここは自分の家だということ、自分の家とはこんなもの、路傍の人情よりはいくらかマシだというようなセンチな気持ちになった。これが失敗のもとで、一部始終をうちの宿六に打聞けたから、いけない。

宿六はきき終ると、静かに顔をあげて

「おい、ヘソクリをだせ」

富子はアツと顔色を変えて

「アラ、オコウちゃんから着物を三枚も買ったわ」

「バカ。あれから四月にもなるんだ。着物の三枚ぐらい買ったって、十万以上残っているはずだ。ここだな」

と、箆たんす笥や戸棚のヒキダシやトランクをかきまわし、ナゲシの隙間や畳をめくってみたが分らない。久しく使はない冬の布団をとりだして縫目を解いて綿の間をしばらく見当らない。

「うちに置いてないのよ」

「どこにある」

「倉田さんの奥さんに預けてあるのよ」

もとより嘘にきまっている。執念の女がヘソクリを人に預けて安眠できるものではない。

「私の稼いだお金だもの、私のものよ」

「バカ。営業妨害だ」

「だってあなたの営業方針なら、あなた自身の売上げだって今より不足で、とっくにお店はつぶれていたはずよ。私たちのおかげであなたも儲けていたのだから、自業自得じゃありませんか。口惜しかったら、あなたもコツクさんのやり方で、安直にやり直して、もうけるがいいじ

やありませんか。私たちが心を合せて、あらた新に女給を募集して、うんと儲けてやりましょうよ。ねえ、あなた」

「じゃア、お前すぐ新聞社へ行つてこい」

「あら、あなたよ」

宿六は委細かまわず、広告の文案を書いて女房につきつけて、

「すぐ行つてこい」

「イヤ」

「行かないか」

たまりかねて、五ツ六ツ、パチパチとくらわせる。富

子がこれだけねばるのだから、ヘソクリはこの家のどこかしらに必ずある。ふと気がついたのは、春先の安値に買った四ツの火鉢だ。それを押入の奥へ積み重ねてある。あの灰の中が怪しい。

やにわに押入をあけて火鉢に手をかけると富子が腰に武者ぶりついた。富子を蹴倒しポカポカ殴って延びさせておいて奥の火鉢をとり下す、とたんに富子が忍び寄って足をさらった。ひっくり返る胸の上に火鉢の灰が傾いて札束が見えたのが最後であった。富子が灰をつかんで宿六の眼の中へ押しこんだ。チラと見た札束を最後にし

て、宿六の眼は暗闇の底へとざざされてしまった。

富子は着物をきかえる。宿六は七転八倒、途中に正氣づいては大変と、もう一つの火鉢の灰を頭からぶちまけて、眼も鼻も口も一緒にグシヤグシヤ灰を押しこんでやる。ゆっくり着物をきかえて、奥の二つの火鉢から十萬ほどのヘソクリをとりだして、着物や手廻りの物と一緒に包みにした。

宿六はお勝手へ這い下りて、まさに水道をひねろうとしている。出がけにもう一握りの灰を鼻の孔にぶっかけ、オカユのはいった鍋を頭へグシヤリとかぶせて、とびだ

した。

×

最上清人は店をしめて、ひねもす飲み暮していた。店では一週間用ぐらゐの酒類が、一人で飲むとなかなか飲みきれない。夜になると外へでて、千鳥足で戻ってきて、万年床へもぐりこむ。飲む金がなくなったら、首をくくって死ぬつもりなのである。そのくせ一日に七八回胃の薬を飲み、胃袋を大切にしている。

死を決して、思い当った思想というようなものは、別  
にない。ただひっくりかえる灰の下からチラと顔を見せ  
たあの札束が残念だ。富子の奴はあの札束でどこで誰と  
何をしていやがるか、札束だけが残念でたまらない。セ  
ツカチはどうもいけない。ハハア、火鉢だなと、気がつ  
いたら、素知らぬ顔、長期戦で店の酒をのみ家から一歩  
も離れずねばってやる。そのうち富子が便所ぐらいは行  
くはずで、その時便所を釘ヅケにしてもよかつたのであ  
る。こう思ふと、残念でたまらない。

店のお客がきて戸を叩いたり、倉田がきて、最上先生、

いないかね、と怒鳴ったこともあるが、知らぬ顔、戸締りをして、主要なところは釘づけにして、酒をのんだり、万年床にごろついているのだ。

二ヶ月あまりで店の酒類も飲みほしたが、彼のヘソク  
りも終りを告げるところへ来てしまった。しかもまだ店  
を売るといふ最後の手段が残っている。これより、この  
店を飲みほすと思うと、なんとなく胃袋に手ごたえのあ  
るような爽さわやかな気もする。その代り、いったい、どこ  
で首をくくったらいのかな、とバカなことを心配した  
もので、街路樹へブラ下つてもいいではないか。焼跡へ

行くと、風呂屋だか工場の跡だか煙突のまわりに鉄骨のグニヤグニヤしているところがあるから、あの鉄骨へブラ下つてもいい。

もう冬がきていた。彼は皮のジヤムパーをきて、マーケツトのコツク氏とオコウちゃんの店を探し当てた。商用にきたのだ。店を売ろうというのだが、昔のナジミでいくらか高く買うだろうと思っていたのに、どう致しまして、彼が一式居ぬきのまま三十万というのに、コツク氏は七万なら、と言うあっぱれな御返事。するとオコウちゃんが横から、あそこは場所が悪いから、いやだわ、

などと足もとを見て、いじめぬく。

ちようど倉田がきていた。

「店を売っちゃうのかね。残念じゃないか。店さえありや、一花さかせるのはワケないはずなんだが、店を売って何か別の商売やるのかね」

「それを飲みほして、首をくくるのさ」

「なるほど。それもよろしい。しかし、なんだな。ちと芸のないウラミもあるな。芸というものは、これは人生の綾あやですよ。誰だつて、ほっときや自然に死ぬんだから、慌てて死んでみなくたつて、どうも、なんだな、お金が

ないからお金をもうける、女がないから女をこしらえるてえのは分るけど、お金がねえから自殺するてえのは分らねえ。じゃア、どうだろう。最上先生、私がお店を買いたいけど、お金がないから、私に貸してくれねえかなア

「貸してもいいよ。毎月三万円なら」

「三万円も家賃を払うぐらいなら、誰だって買いますよ」

「僕は月々三万円いるのだ」

「するてえと、最上先生の言い値で店が売れて、十ヶ月

の命なんだな。オコウちゃんの買い値じやア、二ヶ月と十日か。人殺しみてえなもんだなア。俺なんざア、一夜にして全財産を飲みほしてあしたのお食事にも困ったり、オコウちゃんを彼氏にしてやられても、酒の味がだんだんうまくなるばかりで死ぬ気になったことなんぞは一度もないけど、最上先生のご思想は俺には分らねえ。じやア、こうしちやアどうだろう。オコウちゃんにタヌキ屋の方へ支店をだして貰うんだな。私を支配人ということにして、店の上りの純益六割はオコウちゃん、二割ずつ、支配人の給料と家賃てえのはどうだね。これはけだ

し名案じゃないか」

「だめですよ。先生みたいな支配人、無給だって雇うものですか」

「そう言うものじゃアないよ。それはオレはハキダメから料理をつくる腕はないけど、タヌキ屋の店なら一夜に平均してカストリ二斗、これだけは請合う自信があるです。カストリ二斗という請負い制度で行こうじゃないか。二斗以上の純益は私のもうけ、二斗以下の日は私の給料から差引く。いかがです」

「お勘定」

「いけねえなア。最上先生、たまに会って、呆気なく別あつけれたんじやア、首くくりに出かけるところを引きとめなかつたみたいで、寝ざめが悪いよ」

「僕は商用にきたんだ」

「相すまん。最上先生の商用を茶化すわけじやアないんで、あわよくば私も一口と思ったんだが、オコウちゃん  
が相手じやア。こんなところへ商用に来るてえことが、  
最上先生は決定的に商才ゼロですよ。ここにおいて商談  
は中止に及んで、もっぱら飲みましよう。首くくりも最  
上先生の商談のうちでしようから、すでに拙者はとめな

いです。首くくりも商用てえのは、意気だなア。首くくりが意気てえわけじゃないけれど、人生、なんでも商用、なんでも金談てえのが、たまらねえな。しかし、だんだん身の皮をはいで首くくりへ近づいて行く商用てえのはあんまりイタダケないようだけど、これが浅はかな素人考えというのだらう。私はしかし、最上先生には一つだけ足りないものがあると思うな。それはつまり浮気は宗教である、という思想についてですな。すなわち浮気は宗教であるですよ。キリストも釈迦も説法をやるです。これすなわち口説くどきですよ。衆生しゅじょうさいど濟度さいどというですな。浮

気もすなわち救うということ。口説はすなわち女人を救う道です。浮気によつて救う。肉体によつて救う。口説のカラ鉄砲というのは、いけねえな。一万円あげるとか、お店をもたせてあげるとか、嘘をついて女を口説いてはいけません。金なんかやる必要はない。有りあまるムダな金ならやってもいいが、無い金を有るやうに見せかけて女を口説こうなんてえのは、いけません。遊びとか浮気は、それを為さざるよりは面白い人生なんだから、よつて我々はそれをやりましょう、とこう言うのです。私はその真理たるゆえんを信じているから、私が女を口

説き、女がそれに応ずることによって、女は救われると  
いうことを信じているです。すなわち私の浮気精神はキ  
リストなんで、最上先生の浮気はキリストじゃアねえな。  
ここところが最上先生に足りねえから、最上先生は首  
をくくる。仏教においては孤独なる哲人をしようもんえんがく声聞縁覚と  
言うです。彼等は真理を見ているが、人を救うことを知  
らんです。よって、もっぱら自分を救う。何によって救  
うかというと、死によって救う。真理をさとる故ゆえに自殺  
するです。それは死にますよ。人間は生きてるんだから  
な。生きてるてえのは死ねば終るから、真理を見れば、

死ぬ。死ぬてえぐれえ真理はねえや。つまらねえもんだよ、真理てえものは。そこで、これじゃアいけねえな、というので、<sup>インド</sup>印度においては菩薩というものが現わた。これは色ツポイものだ。孤独なる哲人はいけねえというので、菩薩の精神はもっぱら色気です。人を救うというのは、これすなわち色気です。人生は色っぽくなきゃ、いけねえ。色ツポイてえのは何かというと、男ならば女を救う、女ならば男を救う、これすなわち菩薩です。浮気てえものは菩薩なんだ。ただあなた、金をしぼろうとか、女をものにしようとか、それは印度の孤独なる哲人

の思想ですよ」

「考えなきや、いいんだよ。そんな風に考えて、言ってみたいのかね。言葉なんてものは考えるために在るんじゃないくて、女を口説いたりお金をもうけるために在ればいいのさ。死なんてものは、言葉の上にあるだけだ」

「喋るのがオツクウになっちゃアいけねえなア。ムダな言葉はいけねえと言ったって、女を口説くにも、やっぱりあなた、情緒というものが必要ですよ。女人に向って、この道は佳よき道だから余にしたがえ、と言う。真理は明快だけれども、才釈迦サマなら方便とか、救世軍なら楽

隊とか、ここに芸術てえものがあるんだね。芸術てえものは、ムダなもんだ。あなたはムダがねえから、お金の裏が首くくりなんだなア。しかし、あなた、お金の裏はお金、女の裏は女、きまつてるな、これが生きるということだ。生きることには、死ぬてえことはねえな。ああ、そうそう、この店へは近頃毎晩富子さんが現れますよ。例の彼氏、美学者と一緒にね。目下ダンスホールの切符の売子で、彼氏と同じ屋根の下の伴稼ともかせぎなんだが、近頃はなんとなく、口説いてみたいような色ツポサがでてきたね。あなたと一緒に頃のあの人は口説く気がしなかつ

たけど、つまりなんだなア、あなたの思想は自分の女房まで色ツポクなくさせてしまうんだから、最も孤独なる哲人は、最もヤキモチヤキのようなものかな。しかし、女房というものは、万人に口説かれるぐらい色ツポク仕込まなきやアいけねえのかも知れねえなア」

そこへ富子が瀬戸と並んでやってきた。昔の宿六を見て、アラ珍しい人が来てるわネエ今晚は、と言ったが、富子がこの店へ瀬戸と並んで毎晩くるのは、実は昔の宿六に、二人お揃いのところを見せつけてやりたいからだ。けれども近頃、富子は再び貧乏が身にしみている。十

万円握って瀬戸のところへ駈けつけたまではよかったが、宿六が追いかけてきて取り戻されては大変と、温泉へ瀬戸を誘って豪遊したからたちまちにして文無しとなり、伴稼ぎを始めたが、瀬戸の飲み代で青息吐息、ちつとも面白くない。一緒に飲みにくるのは、昔の宿六に見せつけたい魂胆の外に、三杯ぐらいで切上げて帰らせるためだが、すると美学者は途中で富子をまいたり、引ずったり引ずられたり、なぐったり、なぐられたり、もう一軒、もう一杯と立ち寄って、とどのつまり家へ戻ると、ひねもす喧嘩に日を暮しているなどは、誰も知らない

だけの話なのである。富子は肚はらの中では、どうしてころ宿六運が悪いのだらう、今度はあの絹川という色男のところへ押かけてみようか、いつそ社長のハゲアタマの二号に押しかけてみようか、色々と考えている。

最上清人はポケットから手帳をだして調べていたが、顔をあげると瀬戸の方に向って、

「君の借金がまだ九百六十五円あるから、今日いただけこう」

「どうも、すみませんでした。今日は実は持ち合せが不足なんです」

「じゃ、外套をぬぎなさい」

「そうですか、じゃア」

瀬戸が立上って外套をぬいだ。

そのとき私がこの飲み屋に居合せたのである。私は見たまま逐一を書く必要はないだろう。馬鹿げているのだ。大づかみに結末だけおつたえしておこう。

「これで千円借して下さい」

と言って、瀬戸がオコウちゃんに外套を差出した。この外套は彼の満洲生活の記念品だから品物は立派で、千円のカタにはなるからオコウちゃんは千円貸した。

最上清人は千円をポケットへねじこんで、三十五円のおつりをおいて、そのままブラブラと、ポケットへ両手をつツこんで、いなくなつてしまつた。倉田が何か言つたが、彼は返事をしなかつた。

瀬戸が帰るとき、外套をぬぐと寒いな、すると富子が大声で、寒むそうねえ、可哀そうねえ、と云つたが、オコウちゃんは一心不乱にオツリを数えてそれをハイ、アリガトウと差出したばかり、瀬戸はクスリと笑つて、じやア、またと二人は外へ消え去る。

要するに私が見たというのは、ただそれだけのことな

のである。その日から私はここで飲むことにした。ところが三日目に、この店でも変わったことが起った。

オコウちゃんはもうオナカが大きくなっていた。すると宿六もすでに一国一城のあるじとなったから何百年前からの仕来りしきたでダンサーをお妾にしてよろしくやっていたのをオコウちゃんが嗅ぎだしたから、覚悟をしると、百万円ほどの札束をさらって大学生と駈落かけおちに及んでしまったのである。

私は聴いたまま見たまま有りのまま書いただけの話で、これからどうなるのやら、幸、不幸、誰の運命も分

らない。

私が小便から戻ってきたら、置き去られるの宿六先生、コツクと給仕人と両方忙しく立廻りながら、

「これじゃアまた、ハキダメからやり直さなきやアいけねえ。気を悪くしねえで、しばらくつきあって下さいよ。

へエ、お待ち遠」

と一心不乱であった。





日本文学電子図書館

---

「坂口安吾 ちくま日本文学009」

著 者：坂口安吾

制作者：宮澤一郎

出版社：筑摩書房

2008年9月25日 第2刷発行

---



日本文学電子図書館